系統進化園水槽でのオニバスの栽培について

永木　利夫・原田　尋美

当園ではこれまでオニバスを温室内で栽培してきた（栽培記録第14号参照）。今回屋外の水槽で栽培を行なったので報告する。

栽培に供した水槽は、内径縦150cm×横150cm×深さ60cmのコンクリート製で、土壌の深さ25cm、水深はオーバーフローの口まで25cmとした。（図参照）

植え付け用土は田土にマグアンプK約400ｇ、かきがら石灰約200ｇを混ぜたものを使用した。植え付け１か月後、油粕の玉肥を約200ｇ施した。

スイレン温室の水槽内に保存していた種子で1998年５月に発芽したもののうち１株を、やじり葉が３～４枚展開した６月22日に植え付けた。植え付け当初、生育は緩やかであり、約１か月後、刺の有る円形の葉が展開した。８月にはいると生育が旺盛になり、９月中旬まで盛んに展葉した。１枚の葉は展開してから２～３週間で枯死するが、９月時点で、水面には４～５枚の葉が存在していた。９月中旬には展開した葉が最大となり、長径が81cm、短径は68cmであった。最初の蕾は８月上旬水面上に出たが開花しなかった。期間中、開花は４個を確認したが水中の閉鎖花について４～５花の発生は認めたが数は確認していない。９月中旬に発生した蕾は直径が65mm、長さが85mmであった。10月にはいると生育が急速に衰え、水中に発生した葉も水面上に展開しなくなり、10月下旬には全ての葉が枯死した。生育状況から当水槽では狭く、より広い場所が必要と思われる。

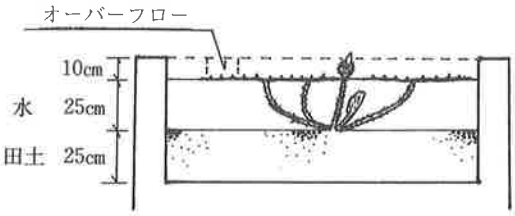
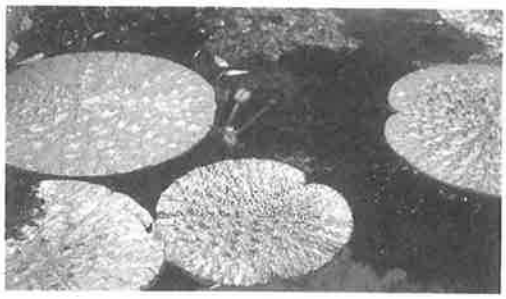


図　水槽断面図



オニバスの栽培状況

熱帯スイレン温室の土壌入替とオオオニバスの生育について

原田　尋美

平成９年はオオオニバス属の生育が悪く、展開葉の直径が最大でも１ｍ程度であった。平成７年に土壌入替を行ない、田土・川砂の混合土から赤玉土・ボラ土の混合土に変更して以来、いずれの種も年々生育が悪くなる傾向にあった。土質の不適合、連作障害、土壌病害、ウイルス汚染など、生育不良の原因はいろいろ考えられたが、いずれにしても、同じ条件下の栽培では、その後の生育に期待が持てなかったため、土壌の入替および植えマスの消毒を行なうこととした。

平成９年12月１日（月）から３日（水）にかけて、熱帯スイレン温室の土壌入替及び植えマスの消毒を行なったので、その内容及びその後の生育について報告する。

植えマス１つの内容積は約1.5㎥と考え、熱川バナナワニ園の資料を参考に用土を用意した。熱川バナナワニ園では、田土を使用しており、